

私は、2021 年の夏から 2 年間、カリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）の公共政策学大学院に留学し、公共政策学の修士号を取得しました。留学にあたって師岡先生には推薦人になっていただき、多くの助言をいただきましたこと、大変感謝しております。以下、UCSD での研究やサンディエゴでの生活について御紹介します。

UCSD は、カリフォルニア州の最南端、メキシコと国境を接するサンディエゴにあります。年中温暖な気候と治安の良さから、小さな子どもを連れての留学には最適な場所でした。公共政策学大学院の学生の半分は非米国人で、中国、韓国、インドなどアジアからの留学生も多かったです。官公庁、シンクタンクや NPO 等へのキャリアを目指し、ステップアップのために学びに来ており、学びの目的意識が明確で、非常にモチベーションの高い学生が集まっていた。

公共政策学は、分野横断的な研究を通じて、社会課題を発見し解決しようという学問です。UCSD の公共政策学大学院は、統計学、経済学、政治・行政学が大きな柱でした。統計学について、今日では、社会課題に関するデータは、国勢調査、顧客データ、衛星画像、SNS への投稿など様々な形で取得することができます。こうしたデータを分析し、解釈する技能を身につけることができました。経済学については、独占や外部不経済といった市場の失敗に対する政府の介入を理解することができました。また、政治・行政学に関しては、政治体制論や集団行動問題といった古典的な理論を学び、現代の問題に当てはめて考えてみる訓練をすることができました。応用物理学科、共同原子力専攻出身の私としては、新しいプリズムを通して社会を見る経験ができ、毎日が刺激的でした。

留学というのは、生活面でも毎日が発見の連続でした。サンディエゴでは、フリーウェイに乗って 10km 以上離れたスーパーマーケットまで買い物に出かけるのもしばしばで、スケールの大きい都市計画や自動車社会を目の当たりにしました。また、買い物をしたり大学の事務所に簡単な依頼をしたりするときにも、日本のようにスタッフが察して動いてくれるようなことは少なく、はっきり自己主張しないと希望がなかなか実現しないという経験も、はじめは驚きを感じました。そして、人種、言語、宗教、性的趣向の多様性も日々実感しました。フォーチュン 500 社の 4 割以上が移民による創業であるという事実などと合わせると、こうした多様性が米国経済や文化の発展に大きく寄与していることを身にしみて考えさせられました。

2 年間の留学は、常識は常識に非ずであることを体感し、仕事と私生活の両面で新しいものの見方、考え方を身に付けさせて頂く非常に価値ある機会になりました。この経験は今後のキャリアに活かし、日本社会に還元できるように頑張っていきたいと考えています。

<https://ucsd.edu/>